

重要文化的景観の風景を訪ねて。＊ 津野町 大古味・口目ヶ市 ＊

清流通信読者の皆様こんにちは。今月は、四万十川源流域津野町から、重要文化的景観の風景を訪ねます。

《重要文化的景観の風景》 津野町 大古味の Gondola

津野町最南端、梶原町との町境に近い集落、大古味地区。四万十川支流北川の、V字型の険しい谷に沿って拓かれた田畑が広がっている。川底でアマゴや鮎の泳ぐ姿までもが見えるほどの、透き通った水をたたえた北川の川辺には、今を盛りにキシツツジが桃色の花をつける。

川を挟んだ左岸には先人が大切に耕してきた水田があるが、道路のある右岸からそこに至る道や橋は、どこにも見あたらない。何度も何度も流されたという、一本橋のわずかな痕跡が残るばかり。

「この Gondola がないとあっちの田んぼはできんがぁよ。祖先から受け継いだ土地は粗末にはできんきねえ。機械類はあっちに置いちゅうがぁやけんど、刈った稲やらは Gondola でこっちまで運ぶき。」 Gondola の持ち主のひとり、竹崎安幸さん(75歳)はそう語る。

昭和38年まで営林署で使っていたという約60mのワイヤーに、縦2m×横1.5mの鉄棒で組み上げた Gondola 船を吊し、こっこの岸から向こう岸まで、農具や人や作物をのせて北川の上を渡して運ぶ。険しい山間地で先祖から受け継いだ土地を大事に大事に耕してきた、この地で農業を営んできた人々の、知恵と努力と発想豊かな精神とが伺える。

そういえば、いつか見た古い外国映画に、あれと同じような鉄で作った鳥かごがあった。この造形的にも美しい、今なお現役で活躍する大古味の Gondola は、津野町大古味地区の重要文化的景観重要構成要素の一つだ。

↓ Gondola の持ち主、竹崎安幸さん



《重要文化的景観の風景》 津野町 口目ヶ市の古民家



「晴れた日にはね、とんびが庭先に餌をもらいにやってくるのよ。こうやってあぶらあげを庭先に持って出て呼ぶと、クルクルと弧を描きながら下降してくるの。」 民宿長寿庵の主、本川仁美さんは餌をもらいに来るとんびの事を、身振り手振りを交えて話してくれた。あたかも「ごはんですよ〜！」と呼んだら帰ってくることも達のごとくに、四方にそびえる高い山のどこからか、とんびが庭に降り立つことを想像すると、なんだか愉快になってきた。

口目ヶ市地区は、仁淀川町との町境に近い津野町北端に位置し、周りを天狗の森(1,484.9m)や黒滝山(1,367.1m)、不入山(1,336.1m)と、1,400m前後の高峰に囲まれた山里だ。南国高知にありながらも、冬季は積雪の多いこの地区には、厳しい自然に適応した古い民家が多く残っている。

現在、民宿長寿庵として使われている加藤家住宅も、茅葺きの上に波板トタンで覆いをした築250年の古民家だ。家の中には囲炉裏があり、その火で燻された梁や柱は長い時を超えて、黒くつややかに輝いている。茅葺き屋根の家を守る為には、囲炉裏で火をたくことと拭き掃除は毎日欠かせないと、本川さんは話してくれた。

この住宅には長州大工の技法が用いられており、当時、藩によって使用が制限されていたヒノキなどは使わず、栗やスギなどを建材にするなど、武家屋敷や豪農屋敷ではない、一般的な民家の特徴を今に伝えるものだという。

「父が残してくれたこの家を、これからもずっと守っていきたい」と、本川さんは今日も囲炉裏に火を入れる。

← ずっと時間が止まっているような、そんな気さえる長寿庵